

背景

文芸評論について学ぶ第一歩として、安部公房『砂の女』について考察する。

問題提起

安部公房の『砂の女』のテーマとして「自由」が挙げられる。作者が提示した「自由」のは一体何なのであったのだろう。

着眼点

今回は、自由と制限について着目する。

本論

この物語において、「砂の村」は、秩序・規則の表徴として描かれる。「砂の村」の繰り返し砂を掻き出す作業、不気味なほどに強い愛郷精神は、それらをよく象徴している。「砂の村」においては誰一人逃げ出す事なく、迫りくる砂から村を守るために絶えず砂を掻き出し続けていたのだった。

物語は主人公が「砂の村」に囚われたところから始まる。囚われた当初、自由を目指し脱出を決心する。しかし、そんな彼の脱走は失敗に終わった。そうして、何度かの失敗を通じ、彼の脱走への意志は完全に失われてしまった。

それでは、彼はなぜ抱いていた外を出歩く自由を求めることへの願望を捨ててしまったのであろうか。

「優れたエッセイ」はなにが優れているのか

導入

「優れたエッセイ」や「良いエッセイ」として語られる本は、おそらくいろんな人の手に届き、そのいくつかの人々の心を動かしたのだろう。私も、そのようなエッセイとして「神様の友達の友達の友達」の友達はぼく」(作:最果タヒ)という本を紹介され、読むこととなった。良いエッセイとして紹介されたものなら、どこが良いのか考察しようではないかということで、これを書くにいたった。ここでは、その「良さ」について、何気ない日々の生活を抽象的な表現へと飛躍させる文学的な美しさや、ほかの文学にはなく、エッセイだけが持つ性質というところに着目して考えていく。

2. エッセイとは

エッセイとは、平たく言えば、筆者が日常の体験で感じたことや思ったことを、自由な形で文章に表現したものである。「神様の友達の友達の友達」の友達はぼく」も、そのような構造で書かれている。この自由な形というのが、我々読者が求める独創性ということになる。つまり、エッセイの良さの一つは、いかに日常的な体験(自然に触れたり、文明に触れたりすること)から得た感想や思想を、抽象的な表現に飛躍できるかといったところにあるだろう。

「探偵防衛率」を求めて一番の名探偵を決めたい！

はじめに

いきなりですが、ミステリーという小説のジャンルには、様々な名探偵が登場しますよね。ある日、ミステリーを読んでいた私は、ふとこう思いました。

「結局のところ、だれが一番の名探偵なの？」

まあ、こんなことを考えても、名探偵たちが登場する時代や場所は様々であるため、結論が出ることは絶対ありません。作者のみなさんももう亡くなっている場合もありますし。調べた結果、「探偵防衛率」を定義して名探偵を比較している記事を見つけたので私もやってみることにしました。この「探偵防衛率」を用いると、なんと名探偵たちを一定の基準で評価することができるのです！

すごい！

「探偵防衛率」とは、簡単に言えば、「事件で被害を受けた人間の数」を「作品の数(今回は一律3作品を扱うとします)」で割った数のことです。分母となる被害を受けた人間の数が少なれば少ないほど、早く事件を解決している(被害をおさえている)ということになるため、この値が小さければ小さいほど(ここでは)優秀な名探偵、となるわけです。他に細かな基準としては、探偵が現場に到着してから被害者の人数をカウント(探偵が来る前にすでに被害者がいてもカウントしない)、犯人による傷害であれば死亡だけでなく重傷もカウントするとして集計しています。また、すべての名探偵を調べ上げるのは不可能なため、私のお気に入りの名探偵たちをピックアップ&紹介しながら防衛率を調べていきたいと思います。

ルックバック

ルックバック

ルックバックは藤野という田舎に住む少女が自作の4コマ漫画により、引きこもりの少女・京と出会うことから始まる。二人は共同で漫画を描き、互いの背中を追って成長していく。しかし、京本はそれでは満足できず絵を上達させるため、美大へ進学する。しかし、京本は進学した美大で、侵入してきた不審者から暴行を受け、この世を去る。その事を知った藤野は自分が漫画を描いたことで京本は死んだのだと自己嫌悪に陥った。そこから、物語は一変し、二人が出会わなかった世界線が描かれる。

読む前から、ルックバックが京都アニメーション放火事件を元ネタにしていること、藤本タツキ先生が美大出身であることをインターネットの情報から私は知っていた。そのような情報を得た後で作品を読むことは良くないかもしれないが、日頃からインターネットを使う現代では不可抗力だったと思う。とにかく、その情報を仕入れたうえでルックバックを読んだ。そのため、私は放火犯への当て付けでもしたいのだろうかと考えていた。しかし、実際は少女二人の絵や漫画に対する真剣な思いが描かれていたように思う。また、藤野と京本の名前は藤本先生の名前からとられている部分がある。二人は藤本先生の分身である。二人は藤本先生自身をそのまま写したキャラクターなのか、それとも理想として描いたのか。藤本先生が誰に何を伝えたかったのか。彼の生い立ちや事件を元に考察した。